

クリスタ・ヴォルフの『カッサンドラ』に見る 女性の声なき声

森 島 吉 美

(受付 2000 年 1 月 19 日)

おとこの歴史の後始末をするおんな達

昨年 (1999 年) の 9 月、ドイツのカッセルで、青少年問題に具体的関わりのある青少年指導者が世界中から集まるセミナーがあった¹⁾。筆者もその研修に参加した。NATO のコソボ介入²⁾ 直後のことであったことから、セルビア近辺の諸外国の指導者との会話が興味をひいた。

チェコから来た一人の女性³⁾ は、つたないドイツ語で、それでも必死に、アラビア諸国の参加者の「NATO 介入」への批判的発言に、反論する。

「わたしは、この10年来、コソボから逃げてきた子どもの世話をしてきた。彼らは親を失っただけでなく、学校にも行けず、大人から習ったのは、セルビア人を殺すことだけ。セルビア人の子どももこれとほとんど同じ。誰かが、早く、この状態を打開しなくては、元の状態に戻るには、この何倍も時間がかかる。NATO が武力介入するのはよくない、とは誰でもいえる。でも子どものことを考えたら……。わたしはじっと耐えて、子どもを抱きしめていた (後は涙で言葉が続かない)」

ある日のパーティーの後、夜遅く電停でセミナー参加者の一人であるルーマニア人の女性⁴⁾ と話す機会があった。彼女は国に 4 歳の女の子を置いてこ

1) Internationales Sprachseminar Deutsch zum Thema Jugendhilfe am Europa-Kollege Kassel (04.09.-02.10.1999) Internationaler Jugendaustausch-und Besucherdienst der Bundesrepublik Deutschland (IJAB) E. V. 主催

2) 1999 年 3 月 24 日夜、NATO 軍のユーゴ空爆開始

3) Hana Urbanova: 彼女は CCI-CAMP Centre International に勤務

4) Lelia Preoteasa: 彼女は青少年スポーツ省に勤務

ここカッセルに来ている。

「ルーマニアは近くていいね、日本は遠くにあってここにくるまで大変でした」と筆者。「わたしはバスでここまで32時間かけてきた」と彼女。「何で又バスで」と筆者の愚問。「だって飛行機はお金がかかるもの」と彼女。「我々の国は、チャフセスク政権に破壊されてしまいました。彼らは政治的体制を破壊しただけではないの。自然なる大地そのものを、ものをつくることもできないほど破壊したの(環境汚染)。国の将来を担う子どもの頭をぶちこわしたの(教育問題)。ゆっくり時間をかけて、〈節約〉して国の建て直しをしていくの」と笑いながら彼女。

フランクフルトへの遠足のバスの中で、スロバキアから来た女性⁵⁾と席を隣り合わせる。

「わたしの国には原発がいくつもあるのよ。チェルノブイルの事故のときは驚いたは。吉美、あなたは世界最初の被爆の町広島からといったわね。一度いってみたいな」と彼女。「あなたは子どもがいるの」と筆者。「ええ、娘が一人。ピアノリサイタルでいまドイツに来ているの」と彼女。「それじゃ、この研修中に会えるね」と筆者の愚問。「でも、彼女がいる街まで行くのにお金がかかるから無理よ」とそっけない返事の彼女。それでも、彼女の子ども話はフランクフルト到着まで2時間とどまることはなかった。

それぞれの国がそれぞれの歴史を抱えて、今旧東欧の民族が西側の世界の仲間入りをせんとしている。

その中で、ドイツから一番遠い国の日本がドイツに一番近く感じ、地理的に近いはずの彼女たちにはドイツが遠い。(だってバスで32時間だもの！)。

NATO、チャフセスク、原発という父権制の象徴的存在の前に、自分の子どもの将来に全身を捧げるおんな達。

昨年、9月の一ヶ月間滞在させてもらったカッセルのホームステイ先の

5) Zuzana Stefunkova: ボーイスカウト運動勤務

主人の話。彼はユダヤ系ドイツ人⁶⁾。ヒットラー時代にはまだ5歳にもなっていないかった。彼の親戚の多くは強制収容所のガス室に送られている。中にはアメリカその他の国に逃げたものもいる。「わたしは、だから世界中に親戚があるんだ」と胸を張る彼。「吉美、わたしが今回日本人であるあなたをホームステイの客として選んだのには訳があるんです。わたしは今、二度目の連れ合いとここで生活しています。最初の妻は、そう、4分の3の日本人でした（笑い）。1910年代にドイツ企業が日本政府の招聘で日本に技術指導でいっていました。その中のドイツ人の一人がある日本人の女性と恋愛をし、子どもまでもうけました。時代が時代ですから、当然、彼女の家族が猛反対し、彼女は勘当されたそうです。彼との3人暮らしが始まりました。ところがそのドイツ人が、ある日、国内事情で、ドイツに帰らざるをえなくなりました。その女性と子どもの二人は日本に置き去りでした。彼女は自分の親の元には帰られず、毎日が家もない、その日暮らしであったそうです。1922年の大震災にあって、彼女は一人の子どもを残して死にました。その幼い女の子は母親の実家に引き取られたそうですが、間もなくして、一人でシベリア鉄道を使ってドイツに父親を捜しにきました。彼女の実家も、ドイツ人との間に生まれた彼女を家においとくわけにいかなかったからです。彼女はハイデルベルクにやって来ました。当時は第二次大戦中でありました。幸い、当時日本とドイツの関係が悪くなく滞在は難しくありませんでした。戦後、連合軍がドイツに上陸してきました。ハイデルベルクにやって来たのはハワイからのアメリカ軍でした。その中に日系のアメリカ軍人がいました。彼は日本人でしたが、戦後自分の存在を保障するためにもアメリカ軍に入らざるをえなかったのです。彼はハイデルベルクで彼女に出会います。すぐに、彼女と一緒に生活を始めます。女の子が一人生まれます。ニュルンベルグ裁判が終わり、間もなくして彼はハワイに帰らざるをえなくなります。ところが日本人である彼女を自国に連

6) Stefan Mitzlaff: (1943年～) 彼は現代画家で、ボスニヤ、コソボを題材にした作品が多い。

れて帰るわけにはいきません。結局二人をドイツに残して彼は一人で帰ってしまいました。二人の間に生まれたその彼女がわたしの最初の妻です。4分の3の日本人の血が入った女性です。わたしが彼女と結婚してから、彼女の父親探しを始めました。わたしの叔父ヒルデスハイマー (Wolfgang Hildesheimer, 作家, 1916年生まれ, 1933年パレスチナへ亡命, 1946年から1949年までニュルンベルク裁判の通訳) は英語が達者で、ニュルンベルグ裁判において同時通訳をやっていました。わたしは妻と、彼女の父親探しをしてみようと決心しました。わたしは妻に英語を教えるために、叔父の紹介でイギリスのある英語教師 (ニュルンベルグ裁判当時の叔父の同僚) を紹介してもらいました。そこで英語を勉強している時、事情を聞いたその教師は、それらしき日本人をハワイで知っていることがわかりました (東京裁判の通訳関係筋から)。我々がハワイで彼を訪ねたとき、彼はハワイの大学で日本語を教えており、韓国人の女性と結婚していました。一人の娘さんがいました」。啞然として、彼の目を見つめたまま沈黙する筆者。「事情があって彼女とは別れました。しかし彼女のお母さんは今もまだブレーメンで生きています。わたしの義理のお母さんですから、常時コンタクトをとっています。今90才近いです。まだ元気ですよ」

血を問題にする父権制の犠牲者としての女性、子ども、戦争という父権制の象徴的存在の犠牲者としての女性、子ども、父権制がつくりあげた啓蒙の最たる産物であるイデオロギーに振り回された女性、子ども、彼女たちの存在は歴史から完全に抹消されている。彼女たちと同じ体験をしてきた一人のユダヤ系ドイツ人から初めて証される事実。「関東大震災、第二次対戦、冷戦、ベルリンの壁崩壊を体験してきた日本人の彼女に会いたい」と筆者の愚問。「日本人に会うわけがない」と簡単明瞭な彼の答え。

カッセルにあるドイツ語語学学校 (Europa-Kolleg) のロシア語が達者なドイツ人教師⁷⁾ は、「旧東欧諸国においては、ヒットラー時代には、左翼の

7) Dozent von Eurpoa-Kolleg Kassel, Rainer Eberhardt

人間が、ソヴィエト時代には、自由主義を唱える人間が抹殺された。一つの戦争を挟んで、インテリといわれる全ての人々がいなくなってしまった。旧東ドイツにおいてしかり、ポーランドにおいてしかりである」と嘆いていた。

先の大戦を幼児期に過ごし、戦後東ドイツで、ファシズムの悪夢を払拭せんと、社会主義体制に夢を抱き（当時16歳）、その後その社会主義体制の崩壊とともに、1989年西側世界への統一（ベルリンの壁崩壊）を体験した一人の女性作家がいる。クリスタ・ヴォルフ（1929年生まれ）である。

ヒットラー体制崩壊の後、旧東ドイツは旧ソヴィエトの支配の元に置かれた。旧東ドイツにつくられていたヒットラー時代の強制収容所は、反ソヴィエト体制を唱える人々を閉じこめる強制収容所に変わった。ザクセンハウゼン強制収容所跡を訪ねると、旧ソヴィエト政府の強制収容所の跡をみることができる。

この旧ソヴィエトの「赤軍」の強制収容所に抑留されていた一人のドイツ人が彼の家族宛の手紙を残していた。妻と二人の子どもを残して彼はそこで死んだ。戦時中はもちろん、戦後においても、「彼の妻は何もない厳しい戦後、二人の子どもを一人で育て、食べるもの、着るものを手に入れ、子どもの就職口を見つけ、住まいや暖房のことも一人で切り抜けねばならなかった」⁸⁾。

このような状況から一人の女性が作家として社会主義体制の中で登場してくる。ファシズム体制崩壊の後、社会主義体制に夢を抱き、その後、またしてもその社会主義体制に裏切られていく作家。

東側における過去克服の裏切りは西側においても同様に起こる。

ベルンハルト・シュリンクは、1995年、興味ある小説、『朗読する人』⁹⁾を発表した。

8) Guenter Agde: Sachsenhausen bei Berlin-Speziallager Nr. 7 1945~1950, Aufbau Taschenbuch Verlag 1991, S. 10

9) Bernhard Schlink: Der Vorleser, Diogenes Verlag 1995

主人公が15歳の時出会った女性ハンナは既に大人の女性であった。主人公よりはるかに年上の女性である。主人公が黄疸で、学校の帰り道倒れた時に助けたのがハンナであった。彼は不思議な雰囲気の中、彼女に惹きつけられ、彼女から離れられなくなる。ある時、彼は彼女を自分の家に招待する。彼女は彼の父親の書斎にある本棚の本を眼にする。

「彼女は、部屋から部屋を歩いて回り、わたしの父親の書斎に来る。わたしはドアにもたれ掛かりながら彼女を観察する。彼女は、あたかも一遍のテキストを読むように壁を埋め尽くした本箱の本を次から次へ眼で追う。彼女は、胸の高さに右手の人差し指を構えて本箱の本の背表紙を追いながら書斎を観察し、部屋を出る」¹⁰⁾

これをきっかけに、彼は彼女に本の朗読を聞かせることになる。まだこの時点では、彼女が字が読めず、字が書けない（非識字者である）ことは明らかにされていない。主人公が彼女に本を呼んで聞かせることからこの小説のタイトル、『朗読する人』がつけられている。

さてある時ハンナが主人公の前から忽然と姿を消すことになる。ハンナが次に登場するのは、主人公が大学で法学を勉強している時に、たまたま彼のゼミの担当教授がナチの犯罪を裁く裁判の研究をしていたことから、実習体験としてあるナチ犯罪者を裁く裁判の傍聴に行った時のことである。

あろう事か被告席の一つに彼女が座っていた。彼女は1922年生まれ。1943年「自分の意志で」ナチスの親衛隊に入隊した。「見張り」の仕事をするということで雇われた。アウシュビッツの強制収容所内の女性を収容所の外にある爆弾製造工場で働かせるため、収容所から工場へ連れていき、そして、働けなくなった女性を又アウシュビッツに送り返す（送り返される女性を待っているのは収容所のガス室送り）仕事。

ある日、アウシュビッツから工場へ移動中、空襲があり、その女性達を近くの教会に避難させたが、そこに爆弾が落ち、教会が炎上した。ハンナ

10) s. o. S. 60

森島：クリスタ・ヴォルフの『カッサンドラ』に見る女性の声なき声

達が訴えられているのは、その時、教会の扉を閉めたままにしておいて多くの女性が焼け死んだことである。

ハンナには、訴えられている理由がわからない。だって、その当時、上からの命令通り自分の仕事を忠実にこなしたのだから。わからないから、その時の行動を裁判官に克明に説明する。自分に不利なことになるなんて彼女には考えられもしなかった。ハンナと一緒に訴えられた他の女性は、訴えられている意味がわかっていたので、何とか言い逃れをする。

親衛隊が残した報告書には、その時の事情が克明に記されていた。言い逃れはできないはずであった（扉を開ければ、隊列が崩れ、逃亡も考えられたから、女性達を教会の中に閉じこめておかざるをえなかったのである）。

しかし、最後に、他の被告達によって、その報告書はハンナが一人で書いたでたらめな報告書であるとされた。つまり彼女一人が責任を負うことになった。その場においてもハンナは、自分が字が書けず、字が読めないことを知られたくないため、一切の弁明はしなかった。

刑務所にいるハンナに、主人公は多くの書物の朗読をテープにとって送り続けた。彼女に再会を約束したその前の日、彼女は首をくくって自らの命を断った（自分のやった行為の意味がわかったからだろうか？）。

何ともやるせない話である。ここにも一人の歴史の犠牲者、女性が登場している。字が読めない、字が書けないハンナが「報告書」の作成者に「でっち上げられ」、ナチが起こした犯罪の責任をとらされる。ナチに引っ張り回され、そして今、裁判官から犯罪者の烙印を与えられるハンナ。

クリスタ・ヴォルフの『残るものは何か』

ここにあげた様々な女性の声なき声を追い求めた作家がクリスタ・ヴォルフである。ここで扱う作品『カッサンドラ』の主人公カッサンドラは、ギリシャ神話のアポロン神の愛に応えることを約束して予言能力を授かるが、愛に応える約束を反故にしたので怒ったアポロンは彼女の予言に誰も耳を貸さなくした（アイスキュロスのギリシャ神話より）。まさしく「声なき

声」の存在がカッサンドラである。

トロイア陥落の予言者カッサンドラは、間違いなく、東ドイツ崩壊の予言者クリスタ・ヴォルフ自身でもあった。

『カッサンドラ』(1983年)の具体的中身に入る前に、この作品とクリスタ・ヴォルフの関係を見ておく必要がある。

この関係を見るには、時間的に逆行するかもしれないが、後年、ドイツ再統一後に発表された作品『残るものは何か』について述べるのが避けられそうにない。

1990年に出版された『残るものは何か』が起こした波紋は前代未聞であった。この作品の詳細な中味にまで入る余裕はここではないが、要は、クリスタ・ヴォルフ自身の自伝的小説で、主人公(作家)は秘密警察・シュタジーにつけ回される要注意人物として登場する¹¹⁾。

「ドイツ戦後における文学論争の中でも、これほど世間の注目を浴びた作品はなかった」¹²⁾。その前年に「ベルリンの壁」が崩壊し、1990年は、ドイツの再統一がなされた年である。「この論争がいかに際だって重要な意味を持っていたかは、その年の12月29日のフランクフルターアルゲマイネ紙の《1990年の出来事》の記事に読みとれる。そこには、12カ月の重要な出来事への簡潔な情報が与えられている。《10月3日。ドイツが再統一される。0時に、人々の歓喜のもと、黒、あか、金色の旗がベルリンのかつての帝国議会に掲げられた》。このように記事は始まっている。3月18日の旧東ドイツにおける最初の自由選挙、そして、11月30日のサダム・フセインへの国連安全保障委員会の最後通告に関する記事を経て、6月10日の日付で、〈ドイツ文学論争〉というタイトルで、次のような記述が登場する。セチーリエン城に、ベルテルスマン財団の招待で、東西の作家、政治家やジャーナリストが集った。クリスタ・ヴォルフ、シュテファン・ハイム、マンフ

11) Christa Wolf: Was bleibt, dtv 1994

12) Thomas Anz: Es geht nicht um Christa Wolf, Fischer Taschenbuch Verlag 1995, S.

レッド・シュトルペ、ヴァルター・イエンス、当時の文化大臣代理のクラウス・ヘプケそして一連の西側の批評家が参加した議論の中心テーマは、文学の独自性喪失への不安であり、西側の文化の営みへの不安であった。特に問題となったのは、当時の東ドイツのリーダー的作家が、細かいところでは批判的ではあったものの、大筋において、東側体制、国家それに非民主主義的システムを支えていたのではないかということであった。特に、クリスタ・ヴォルフとシュテファン・ヘルムリンが非難された。そして、その非難の中味は、当時、(東ドイツの)体制批判的作家が迫害されている時、何もせず、その体制が壊れると自ら犠牲者であったという主張に対して。ギュンター・グラスとヴァルター・イエンスは、西側批評家に対して、当時の東ドイツの過去克服に対して立ち入る権利はないと論陣を張った。そのことに端を発して、その後マスコミにおいては一年中激しい議論がなされることになった」¹³⁾

ナチズム体制が崩壊すると同時に、その迫害を逃れて外国に亡命していた作家が東ドイツに帰ってきた。その後ソビエト体制が強くなると、その迫害を逃れて東ドイツから亡命する作家がでてきた（なかには、Biermannのように市民権を剥奪されたものもいた¹⁴⁾）。その中で、クリスタ・ヴォルフはドイツ再統一まで東ドイツにとどまった。問題は、彼女と当時の東ドイツの秘密警察シュタジーとのつながりである。

1993年2月にギュンター・グラスはクリスタ・ヴォルフに一通の手紙を送っている。その中で、「ドイツ再統一前にはめったに会うことはありませんでしたが、いままで、会えば、我々はしばしば真っ向から相反する意見を交わしたものです。わたしが判断するに、あなたは、その一員であった党（SED）の批判をもっと鮮明に、精力的にすべきであったと思う」¹⁵⁾と述べている。

13) s. o. S. 7~8

14) 1976年11月17日

15) Christa Wolf: Auf dem Weg nach Tabou, dtv. 1996, S. 225

これに答えて、クリスタ・ヴォルフは、「わたしは党への批判は非常に鮮明にしていた。……わたしはそのことを多くの人々に書いた。ただ西側のメディアにはいわなかった。それはその通りです。それは、何も、わたしが西側の賛同を避けるためではなく、東ドイツにとどまることを決心していたためなんです。西側のメディアに走って行ってしまえば、東ドイツにとどまってそこでなんらの働きかけをすることができなくなってしまうだろうから」といっている。そして、「わたしはこの国（東ドイツ）を愛していた。この国が終焉を迎えんとしていることは知っていた。それは、最上の人間をもはや受け入れようとはせず、犠牲者を要求するような国になってしまったから。わたしはそのことを『カッサンドラ』の中で書いた。当時の西ドイツのフランクフルト大学において行った『講義〈ある物語、カッサンドラの諸前提〉』の出版に際して東ドイツでは検閲がいろいろ行われた。

彼らが、この『カッサンドラ』の物語のメッセージをあえて読みとろうとするか、わたしは、神経をとがらせてみていました。そのメッセージとは、トロイアが滅びなければならないということです（東ドイツの崩壊を暗示している）。彼らはそこまで理解することはせず、物語はそのまま出版されました。東ドイツの読者はこの物語を理解しました」¹⁶⁾ とつけ加えている（1993年3月）。

『カッサンドラ』が出版された時には、東ドイツにおいては、《Sinn und Form》¹⁷⁾ の編集者であるギルヌスは、「西側の読者におもねるために階級闘争の代わりに性の闘争を中心に据えた」と的外れの批判をしている。

西側のクリスタ・ヴォルフ批判も、東側のクリスタ・ヴォルフ批判も、ヴォルフ自身には的を射ていないように映る。

権力に与したか、階級闘争から眼をそらしたのか、その判断基準は所詮男が持つ尺度に過ぎない。こういった男の批判、評価もひっくり返してヴォルフは批判の対象にしている。クリスタ・ヴォルフの尺度は男のそれとは

16) s. o. S. 261

17) Sonji Hilzinger: Cassandra-Ueber Christa Wolf, Haag+Herchen Verlag 1984 S. 5

森島：クリスタ・ヴォルフの『カッサンドラ』に見る女性の声なき声

全く違う。「女の尺度」がそれである。

『カッサンドラ』の中にその「女の尺度」を探っていくことがこの論文の中心的テーマとなる。

『カッサンドラ』の解釈の試み

ヴォルフと神話

カッサンドラとはギリシャ神話に現れるトロイアの王プリアモスの娘にして予言者であった。

トロイアを陥落せしめたギリシャ軍の総大将アガ멤ノンの「おんな」としてミケナイに連れてこられたカッサンドラがアガ멤ノンの宮殿の入り口（ミケナイの獅子門前）で待たされている。宮殿内では、アガ멤ノンの妻クリュタイムネストラが待っている。

『カッサンドラ』の物語は、その宮殿の入り口前で待たされているカッサンドラの「語り」で始まり、その「語り」で終わる。物語の終わりまでカッサンドラは彼女がトロイアで体験してきた「歴史」を語る。

この過去を語りながら、予言者であるカッサンドラには、これから先にいかなる運命が彼女を待ちかまえているかはわかっている。

アガ멤ノンが妻クリュタイムネストラに「復讐」され殺されることがそれであり、そして、「彼女自身の死」がそれである。

ここまでの筋は、アイスキュロスの「神話」からその題材をとっている。

しかし、ヴォルフの『カッサンドラ』はアイスキュロスのそれとは明らかに様子をことにする。

ヴォルフの『カッサンドラ』においては、語り手は女性の登場人物の一人カッサンドラである。彼女の視点から出来事が語られる。

ギリシャ神話（叙事詩）（ホーマーの『イリアス』等）には、全ての出来事を見通す「語り手」が存在する。それは演劇（アイスキュロスの『オレステイア』等）においても、筋を運ぶ、決して舞台に登場することがない絶対的な語り手がいる。

「一人称の語りで神話中の登場人物に語らせることによって神話は信憑性を手に入れ、結果として、神話は作品の中で語る主体になる。一方、(童話の中にあるような) 絶対的語りのスタイルでは、神話は語りの対象物となり、神話の表現手段と作品の表現手段の間には何等の結びつきが存在しない」¹⁸⁾

この神話の主体化があって初めて、『カッサンドラ』における登場人物の心理的動きの描写、意味づけがでてくる。つまり、登場人物の「脱(非)ヒーロー化」がそれである(特にアキレウスの場合)¹⁹⁾。

一方、語られる中味に関しては、アイスキュロスのそれと、基本的な出来事の流れは異なることはない。トロイア戦争勃発、トロイアの崩壊、アガ멤ノンによって「戦利品」のごとくミケネイに運ばれ、予言者カッサンドラは殺される。

なるほど、ヴォルフのカッサンドラは、一般的に見られるアポロン神のスピーカーとしての予言者ではなく、「感覚と知性の自然な可能性を備えた」²⁰⁾ 予言者として登場する。その限りにおいては、この作品は非神話化・脱神話化と考えられるが、カッサンドラが持つ認識や認識能力の範囲からすれば、アイスキュロスの神話のそれを越え出るものではない。

つまり、『カッサンドラ』においては、いわゆる「世俗化としての合理化」²¹⁾ は見られないということだ。これはヴォルフの作品を理解していく上で非常に大事なところであるように思われる。

カッサンドラの認識それ自体は、直観的精神的過程として、神話的なもの(啓蒙のフィルターを透した世界ではなく、啓蒙が自らの支配下におこうとしてきた自然なるもの)に結びついている。それに、肉体の心的精神的なものへの統合としての肉体としての言葉がそれに加わる(啓蒙の発展

18) Katherina Glau: Christa Wolfs "Kassandra" und Aischylos' "Orestie", Universitätsverlag C. Winter Heidelberg 1996 S. 52

19) s. o. S. 53 参照

20) Sonji Hilzinger: Christa Wolf, Stuttgart, Metzler 1986 S. 136

21) Katherina Glau: s. o. S. 53

森島：クリスタ・ヴォルフの『カッサンドラ』に見る女性の声なき声

と共に肉体がどれほどの扱いを受け退化してきたことか、一方、言葉は即自性を失い対自的にのみ機能するようになる)。

「カッサンドラは自身の感性に信頼を置くだけでなく、彼女の身体の手紙にも耳を貸す」²²⁾。

ヴォルフのギリシャ神話への関係は、だから、単なる素材の改変や、中心テーマからの逸脱といったものではない。素材やテーマからは逸脱することがない。むしろ、素材とテーマに忠実に従うことによってアイスキュロスを飛び越えてより生の素材（自然なるもの）に近づこうとしている。

ヴォルフ自身、『カッサンドラ』制作に当たって、Ranke-Graves, Kirk, Roscher, Seemann, Vollmer²³⁾などを参考にしている。

それでは、生の素材（つまり、口述で伝えられてきた神話的なもの）に近づくとは何を意味するのか。文字をもって作品として伝えられてきた神話とは、一体何を意味するのか。非神話化、脱神話化の意味するところは何か。

ヴォルフの『カッサンドラ』の解釈を試みる多くの人々は、この神話への関係を論ずるとき、アドルノ・ホルクハイマーの『啓蒙の弁証法』を持ち出す²⁴⁾。

『啓蒙の弁証法』を解明する手がかりは自己保存である。啓蒙の弁証法は自己保存の弁証法である。この観点からいけば、神話も自己保存の原則から生まれている。アドルノは、既に、神話は、それが宇宙に対する秩序づ

22) s. o. S. 53

23) Robert Ranke-Graves: Griechische Mythologie, Hamburg 1960 G. S. Kirk: Griechische Mythen, West-Berlin 1980

W. H. Roscher: Lexikon der griechischen und römischen Mythologie, Hildesheim 1865

Otto Seemann: Mythologie der Griechen und Römer, Leipzig 1868 Dr. Vollmer: Wörterbuch der Mythologie aller Völker, Stuttgart 1987

24) Stefanie Risse: Wahrnehmen und Erkennen in Christa Wolfs Erzählung "Kassandra", Bamberg 1986 など

けの試み、解釈パターンの確立の試みである以上、一個の啓蒙であり、そうであるが故に、この「啓蒙としての神話」からの啓蒙による脱出、つまり意識の発展と成長は神話の暴力的性格の増大でしかない、といっている²⁵⁾。

「啓蒙は神話に対して神話的恐怖を抱いている。……あらゆる自然的な痕跡を、神話的なものとして方法的に消し去ってしまった後、もはや身体でも血でも心でも、いやほとんど自然的な我でさえなくなってしまった自己は、超越論的、論理的な主観へと昇華され、行為に対する立法の法廷たる理性の基準点になる」²⁶⁾

神話も自己保存という原則に貫かれた啓蒙であることを知っていた「啓蒙」は、神話を徹底的に世俗化し、自己保存の原則を神話に否定し、それを自らの専有物にしていく。

しかし、自己保存という共通の通路を通っていつでも神話が啓蒙の中に入ってくる。啓蒙の神話への不安はここからくる。現にこの前の大戦においてそれは現実のものになっている。アウシュビッツがその例である。

「ファシズムは反理性的、非合理的ではなくて、道具化した理性の社会化の帰結である。ファシズムと共に、西欧文明は歴史の初発に回帰し、理性は神話になる」²⁷⁾

「詩的作品としての神話」は既に「啓蒙」そのものである。

主題においても、出来事の因果性においても、既に啓蒙的論理的思考に貫かれている²⁸⁾。

しかし、Glauは、ヴォルフとアドルノ・ホルクハイマーにおける神話のとらえ方に明らかな違いを見る。ヴォルフにおいては、神話の中の「神話的なもの（啓蒙的思考によって加工される以前のもの・口述伝記によって

25) 三島憲一：「理性の破片と痕跡をめぐって」、現代思想、1987/11, S. 53

26) M. Horkheimer / T. W. Adorno: 『啓蒙の弁証法』、徳永恂訳、岩波書店、1998

27) 今村仁司：「アドルノの根本モチーフについて」、現代思想、1987, 11, S. 69～

28) Katherina Glau: s. o. S. 43

伝えられるあるがままの自然)』²⁹⁾への批判は重要なものではなく、むしろ逆に神話の中の啓蒙的なものへの批判を主にしている。結果として神話そのものは破壊されることはない。

一方、アドルノ・ホルクハイマーにおいては、啓蒙は、神話の中の神話的なもの（野蛮で自然的なもの）への批判が前提である。

ヴォルフはその神話の中にまだかいま見える自然なるものと啓蒙の葛藤の壁を越えて自然なるものに近づいていった。

アドルノ・ホルクハイマーは、『啓蒙の弁証法』の中でホーマーの『セイレーンの物語』について次のように述べている。オデュッセウスが、船で凱旋帰国する時、セイレーンの歌声が聞こえる島を横切る。この歌声を聞いた人間はその歌声のすばらしさにとりこになり、島に上陸し、そこから逃げられずただ死を待つだけとされる。セイレーンの存在そのものはいわゆる「自然なるもの・わからないもの」である。この恐怖へのあこがれは誰もが持っている。でも、啓蒙の申し子オデュッセウスは、そこから逃げるわけにもいかず、船の舵取り人たちには耳栓をし、自らはといえば、自身を帆柱に縛らせ、その島を横切らせる。結果として、自身はこの自然なるものに接する事ができ、しかもそれにとりこにされず、その誘惑を知恵によって克服した。ここでは、啓蒙と自然なるものとの具体的葛藤がある。舵取り人はさながら現代の労働者のごとく、命令者によって、自然なるものの誘惑に対しては「耳栓」をされ、ひたすら仕事に励む。そして、あの恐ろしい「セイレーン」は、支配者層にとっては、ただ消費されるだけの快楽の対象物、すなわち「芸術」になる。自然なるものは見事なまでに消し去られている。

アドルノ・ホルクハイマーの関心は啓蒙の始祖オデュッセウスに向けられる。一方、ヴォルフの関心は、あくまでセイレーンのような自然なるものの方にある。アドルノ・ホルクハイマーによって、「セイレーンもスフィ

29) s. o. S. 45

ンクスと同じ運命を辿ったのであろう」³⁰⁾ と簡単に片づけられたこの自然なるものの中に、ヴォルフは、「おんな」の存在を見い出す。

『啓蒙の弁証法』中の啓蒙があれほど恐れていた神話の中の自然なるものの中に、ヴォルフは母権性を見いだす。それも、男どもが恐れおののき、消し去ろうと躍起になっている母権性を。神話という啓蒙の始まりは、自然なるものとしての母権性の消去から始まったのだ。

『『苦悩によって学ぶこと』、これが新しい神々の掟であり、同時に、男性的思考の道でもあるように思われる。男性的思考は、母なる自然を愛することをせず、母なる自然を支配するために、そして自然を遠く離れた精神世界の驚くべき殿堂をたてるために、母なる自然を見極めようとする。以来、女性たちはこの精神世界からは締め出され、人々が恐れなくてはならない存在になる。……意志に反する知恵、自然の喪失による文化の獲得、苦悩を通しての進歩、つまり、紀元前四百年に掲げられたこれらの公式が、西洋の文化の根底にあるのだ」³¹⁾

トロイアの陥落寸前、カッサンドラの恋人アイネイアスがイデ山の山中に逃げるようにカッサンドラを迎えにくる。しかし、カッサンドラは、愛するアイネイアスと行動を一緒にしなかった。

「ねえ、アイネイアス、あなたには選択の余地がないわ。あなたは、幾百人もの人の命を救わなくてはいけないもの。あなたは彼らのリーダーだもの。近い内に、そう、間もなくしてあなたは英雄として存在しなくてはならなくなるわ。……あなたはわたしが何を言いたいかわかったわね、あなたの目を見ていればそれがわかるわ。英雄を愛するなんてわたしにはできないの。あなたが立像に変身するのなんか見たくないもの」³²⁾

アイネイアスも又、神話の中の自己保存の原理の継承者として父権制の

30) 『啓蒙の弁証法』：s. o. S. 86 参照。スフィンクスはオディッセウスに謎を解かれ直後に自害する。

31) Christa Wolf: Voraussetzungen einer Erzählung: Cassandra, Luchterhand Literaturverlag, 1983, S. 191

32) Christa Wolf: Cassandra, Luchterhand Literaturverlag, 1983, S. 184

森島：クリスタ・ヴォルフの『カッサンドラ』に見る女性の声なき声

代弁者となっていくことをカッサンドラは知っていたからだ（後のローマ建国の人となったといわれている）。

カッサンドラは自然の中にとどまった。ヴォルフも又、神話を非神話化することなく、作品としての、だから啓蒙の産物としての神話の中の自然にとどまった。

絶えず神話の逆襲におびえ続けるアドルノ・ホルクハイマーの心配をよそに、ヴォルフは、ヨーロッパの全歴史を覆す力を神話の中に探し求めた。「母なる自然」がそれである。

『タブーへの道のり』に駆り立てられるカッサンドラ

カッサンドラと同じように、魔術的性格を備えた登場人物を持つ作品に、『メディア〈声〉』（1996年）がある³³⁾。

紀元前431年、オイリピデスの作品に初めて登場するメディアは、吐き気を催すような子殺しの女として登場するが、ヴォルフの手にかかると、コリントの王クレオンの宮殿で生じた殺人事件の優れた謎解き人物となる。

実はその殺人事件とは、クレオンの娘イフィノエが彼女の父の権威継承者となったが、父クレオンは、新たな女性支配へのあらゆる希望をその芽のうちに摘んでしまおうとしたのだ。そのため自身の娘を、人目につかないようにして神々に生け贄として捧げたのであった。クレオンとその部下は、事件の真相を暴くこの女性予言者に対して陰謀を企て、逆に彼女に兄殺しの汚名を着せ、国外追放にした。

「とうとう、わたしが模範として生きていける様なものは存在しなくなったわ、あるいは、そもそもそのようなものは存在しなかったのかしら」³⁴⁾

この作品にも、母権性の存在を臭わせるところがある。メディアが模範として生きていける「女の存在」は今ではもう無い。メディアは、それを求めて、男たちが踏み込ませまいとその扉を必死に閉ざす世界、「タブー」の

33) Christa Wolf: Medea Stimmen, dtv, 1998

34) Fraz Baumer: Christa Wolf, Morgenbuch Verlag, 1996, S. 100

世界へ突入する。

「彼女の狂気は本当の狂気でもありうるし、又、彼女の人格、(そして人類の歴史)のずっと昔の未分化段階への退化でもありうる。例えば、タブーを破りたいという、とても認められそうにない要求によって、それは引き起こされるのだ。」³⁵⁾

カッサンドラが成長と共に、彼女をとりまく「男の社会」を「みる」ことを始める(予言者としての出発点)。初めは、特に父親にして王であるプリアモスや母親ヘカベーの言動の中に、彼女に理解できない、腑に落ちないことを見い出した時、それを受け入れることができず、そんな時は決まって、「発作」に襲われた。まわりには、彼女が「気が狂った」としか映らなかった。しかしこの「発作」はカッサンドラにとっては単なる発作ではなかった。

「わたしがとうとう落ち込んでいったその錯乱の中に、奇妙なことに、勝利の輝きが先んじて飛び込んでいった。わたしたちの抑えて言わなかった意見と病気との狡猾な同盟をよく知らないものにとっては、奇妙なことなのだ。つまり、それは発作だった」³⁶⁾

「気が狂う」どころかカッサンドラはこの発作によって「錯乱状態になる」ことを免れたのだ。発作も起こさず、平常心でいるトロイアの人々は、みんな「錯乱状態」にいる。

やがて、彼女は、目の前の嘘を暴き、それを嘘と語り出すと、まわりから敬遠され、孤立に追いやられるようになる。とうとう最後には、父プリアモスによって幽閉されることになる。

彼女も、メディアと同じく「タブー」の世界へ入っていく。

1994年、『タブーへの道のり』という本が出版された³⁷⁾。ヴォルフはその中で、「タブーとは存在しない場所のことです。それがタブーと名づけられ

35) Christa Wolf: Voraussetzungen einer Erzählung: Kassandra, s. o. S. 354

36) Christa Wolf: Kassandra, s. o. S. 56~57

37) Christa Wolf: Auf dem Weg nach Tabou, dtv. 1996

るとぱっと輝きをもって人を惹きつけ誘惑し、とうとう人々はそれを求めて動き出さざるをえなくなるのです。ただ極度の身体的精神的集中さえあればいとも簡単に手に入るものなのです」³⁸⁾ と言っている。

『タブーへの道のり』とは、「ユートピアへの探求」でもある。「タブーへの旅は、あらゆる憧憬の中の憧憬、憧憬の中心へ向かって行く。他にどんな可能性があるといえるのか」³⁹⁾。

タブーへの旅とは、だから、啓蒙によって男どもに克服された存在、完膚無きまでに葬り去られた母権性への旅のことである。

カッサンドラも、メディアも、そしてヴォルフ自身もこの「タブー」のふたを開けていく。

カッサンドラの「タブーへの旅」の案内人としてまず母親ヘカベーが登場する。

第二次の船がギリシャめがて出航するときの「口実」は、スパルタ人テラモンにさらわれたプリアモスの姉ヘシオネを奪還することにあった。

「ヘシオネは、と父プリアモスは会議の席で言った。彼の声には、今にも泣き出しそうな悲壮な響きが込められていた。王であるわたしの姉ヘシオネは彼女を略奪したあのスパルタ人テラモンによって囚われの身である。その会議に居合わせた全ての男達は啞然として王を見つめていた。そう、そう、囚われているのですわね。ヘカベーはあざけた。略奪されたのですわね。いずれにしても、ヘシオネはスパルタでは侮辱を受けるような囚われの身ではないですよ。違いますか。情報が正しければ、あのテラモンは彼女を妻にしたはずです。王妃として。そうじゃなくって。そんなことは全然問題じゃないんだ。誘拐された姉を奪い返そうとしない王は面子を失うのだ」⁴⁰⁾

ヘカベーは「かしこい」おんなだった。プラグマチストであった。しか

38) s. o. S. 186

39) Franz Baumer: s. o. S. 100

40) Christa Wolf: *Kassandra*, s. o. S. 51~52

し、彼女はプリアモス王の内面には決して入り込まない。彼女には、カッサンドラが政略的に結婚させられたことも、ポリュクスネがアキレウスを殺す道具にされたことも、ヘレネー略奪が戦争の引き金になることも、ヘシオネの件と何等変わり無いものとわかっていた。「おんな」が「もの」として扱われていることを。

「アリスベの言うことが信じられれば、ヘカベーはパリスが生まれるすぐ前に、一本の薪を産む夢を見た。その薪から何匹もの燃え盛る蛇が這い出てきた。このことは、予言者カルカスの解釈に従えば、ヘカベーが産むこの子どもはトロイア全土を火の海にするだろうということだった」⁴¹⁾

この予言を聞いたとき、ヘカベーはこの夢について、プリアモスの先の側室アリスベに相談している。

アリスベの返事は、「この子どもは、あらゆる家の火の守り神として蛇の女神を復権させるように定められていることもありうる」⁴²⁾ というものであった。

ヘカベーは、敢えて、公認の信託代弁者を避けて、王の昔の側室アリスベに相談している。彼女はもちろんアリスベの予言を信じている。しかし、その後、彼女のとった行動は、パリスを人知れず殺すという王の決定に従うことだった（しかし、王の思惑とは違ってパリスは生き延びた。「おんなに丸め込まれて」⁴³⁾）。

このヘカベーの夢の話のアリスベから聞いたカッサンドラは、「わたしの頭皮はひきつった。今耳にしたことは危険なことに違いなかった」⁴⁴⁾、と驚きの様子を示している。彼女は、既にタブーの中に足を一歩踏み込んだ。

「相容れないものを一緒に求めるべきでないと、ヘカベーは早くからわたしに教えてきた。もちろん、それは無駄なことだった。あなたの父上は、と

41) s. o. S. 69

42) s. o. S. 70

43) s. o. S. 71

44) s. o. S. 70

彼女はわたしに言った、全てを欲しがる。しかも全てを同時に。ギリシャ人達が彼らの品物をヘレスポンドを通過して輸送してもよいがその代償は払え、というのはいいでしょう。そのことでプリアモス王を敬えというのは間違いです。ギリシャ人達が自分たちが優れていると思えば、王を嘲ります。そんなことで気持ちを害してどうするんですか。彼らが金を払うなら笑わせておけばいいのです。それに、カッサンドラ、とヘカベーはわたしに言った、あなたは父上の心の奥にあまり深入りしないように心掛けなさい」⁴⁵⁾

しかしヘカベーにはわかっている。カッサンドラが彼女のいうことを聞かないことを。カッサンドラは彼女とは違うということを。ヘカベーはカッサンドラの発作を見極めていた。

「この子は気が狂っている。母のヘカベーは、男の力を潜ませた両腕でわたしのひきつり震える両肩を壁に押しつけた。わたしの手足がひきつる時にはいつもそれに対して冷たい固い壁があった。死に対して生が、わたしの無力に対して母の力が」⁴⁶⁾

この発作がカッサンドラを守ることを、ヘカベーはわかっていた。そして自身にはこの発作が起こらないという悲劇を知っていた。

「ヘカベーはわたしのことを小さな子どもの時からわかっていた、そして必要以上にわたしのことを心配しなかった。この子はわたしを必要としない、そう彼女はいった」⁴⁷⁾

何度かの発作を繰り返しながら、カッサンドラは男たちのタブーの世界に入っていく。

第三次の船で、プリアモスの息子パリスが、当時、絶世の美女と称えられていたスパルタ人メネラオスの妻、ヘレネーを略奪して帰還した。このことが、ギリシャとトロイアの本格的戦争が始まるきっかけになった。と

45) s. o. S. 58～59

46) s. o. S. 62

47) s. o. S. 21

ころが、本当の所、パリスは確かにメネラオスからヘレネーは奪ったのだが、途中立ち寄ったエジプトで、その地の王に彼女を奪い去られていたのだ。トロイアにはヘレネーはいない。

「あのいまましいヘレーネの話については、お前とはもっと前に話をしておくべきであった。いかにも、彼女はここにはいない。エジプトの王が、あの愚かな若者パリスから彼女を奪ったのだ。そんなことぐらい宮殿の誰もが知っている。なぜお前が知らないのか。さてこれから先どうしたものだろう。どうしたら面子を失わずに切り抜けられるだろう」⁴⁸⁾

このおろかな王に向かってカッサンドラは答える。「お父さん、とわたしは二度と彼に話すことがないほどの切羽詰まった調子で、言った。幻のために闘う戦争は負けるしかありません」⁴⁹⁾

トロイアの敵ギリシャ艦隊の、あの偉大にして有名な統率者アガメムノンはカッサンドラの前では、何とも情けない姿を晒してしまう。

「わたしはアガメムノンに、イフィゲネイアのことをあけすけに聞いた。彼は泣いた、しかしその涙は喪の悲しみからのものではなかった。それは不安と弱さからのものであった。わたしはどうしてもそれをしなくてはならなかった。何を、とわたしは冷淡に聞いた。わたしは彼がそれを話すのを聞きたかった。彼は身をよじった。わたしは彼女を犠牲に捧げねばならなかった。そんなことをわたしは聞こうとは思っていなかった。『殺戮』、『虐殺』という言葉は、殺戮者や虐殺者には不知の言葉であった。同じ言葉を話していても、わたしは彼らからなんと遠いところにいるのだろう。あなた達のカルカスが、とアガメムノンは訴えるように言った。順風のためにわたしからこの犠牲を厳しく要求した。それで、あなたは彼を信じたのですか、とわたしは彼に言った。わたしはたぶん信じてはいなかった、とかれはめそめそ泣いた。いいえ、わたしは信じてなどいなかった。他の者どもが、諸侯達が、みんなが司令官のわたしを妬んでいた。誰もが人の不

48) s. o. S. 96

49) s. o. S. 96

森島：クリスタ・ヴォルフの『カッサンドラ』に見る女性の声なき声

幸を喜んでいて。一司令官が迷信を信じる多勢に対してなすすべがなかった」⁵⁰⁾

自己保存の原則に「啓蒙された」アガ멤ノン⁵⁰⁾は、自らの娘を「犠牲」の名の元に殺害する。自然なる、肉体を持った血の通うイフィゲネイアへの通路はアガ멤ノンには遮断されていた。「犠牲」を「殺害」にかえれば済むことなのに。

カッサンドラはタブーへの道をどんどんすすむ。

カッサンドラの召使いマルペッサは、「トロイアの川、スカマンドロスの断崖状の川岸にある洞窟の住居」への案内人であった。ここは女たちの村であり、女神キュベレが信仰されている。アポロン神をまつる父権制のギリシャと対照的にここは母権性が支配しているアウトサイダーとしての「ユートピア」である。

「戦争の真っ最中だったわ、とマルペッサは言った。もうずっと前から私たち女性は、イデ山の斜面の洞窟の前で毎晚会ったものね。あの高齢の産婆達もまだ生きていて、歯の抜けた口でくすくす笑っていた。それにマルペッサ、あなたでさえあの当時わたしのことをだしにして笑っていたわ。わたしだけは笑わなかったわ。わたしの当時の心の傷が膨れ上がっていった時、アリスベはわたしに言ったわ。顰めっ面などしないで、あからさまになんでも言ってくれる人々がいることを喜んだ方がいい。権力者の家に生まれたとこの娘さんがこんな幸運を持っていますか。……マルペッサ、わたしたちが、戦争の最中に城塞の外で、わたしたち事情に通じたもの以外には誰一人知らない道を通して、定期的に集まっていたなんて、誰が信じるでしょうね」⁵¹⁾

アリスベはこの「スカマンドロスの河畔」のリーダー的存在であった。

自己保存の原則・啓蒙に犯されていない、自然なるものに支配された理想郷がスカマンドロスの河畔であった。

50) s. o. S. 74～75

51) s. o. S. 73

ギリシャ神話で「勇猛果敢」と謳われたアキレウスは、ヴォルフの手にかかると、軍隊の召集を逃れて「同性愛」に走っていたところ、発見され、いやいや戦場に出向いていく人物となる⁵²⁾。しつこく彼を捜すように命じたのはオデウッセウスであった。「あの老練で先見の明あるオデウッセウスでさえ、自ら狂気を装って軍隊の召集を免れようと思った。……彼は、自分が血を流さねばならない場から他のものが逃げることは我慢がならなかった。……アキレウスは、……闘いの中では、自分が臆病でないことを見せるために鬼畜と化した」⁵³⁾

ここまでくると、ギリシャ神話の英雄も形無しである。ヴォルフの意図は、カッサンドラの「狂気の日、発作」を通して、「歴史」を作ってきたはずの「男」たちの自己保存の原理の奥にある「生身」を晒すことにある。

アキレウスやオデウッセウスはこの「生身」への恐怖が大きいあまり、錯乱の啓蒙の道をまっしぐらに走っていった。

カッサンドラが唯一人手に負えない相手がエウメロスであった。

エウメロスはさながら、旧東ドイツの秘密警察そのままの姿で登場してくる。トロイア内で傍若無人をむさぼるアキレウスを前に、プリアモスはなすすべをなくしている。(いってみれば官僚の一人) エウメロスは、トロイア中に防衛網を張り巡らす。エウメロスがどうしても必要と思えばいつでも、人が携帯している物は何でも、厳しい検閲を受けることになった。

「エウメロス、とわたしは言った。それはできないわ(もちろん、それができるとわたしにはわかっていた)。なぜですか、とエウメロスは慇懃無礼に尋ねた。そうすれば、ギリシャ人より我々の方が傷つくからですよ。今おっしゃったことをもう一度聞かせて下さい、とエウメロスが言った。この瞬間、わたしは恐怖に襲われた。エウメロス、とわたしは頼み込むように叫んだ。そしてそのことを、いまだにずっと恥じている。でも、とにかく、わたしの言うことを信じて。わたしはあなた方と同じことを望んでい

52) s. o. S. 113

53) s. o. S. 113

るんですよ。彼は唇をぎゅっと締めた。この男にはかなわなかった。すばらしいことですね、ととってつけたように彼は言った。それじゃ、あなたは我々のとる措置を支援して下さいませんか」⁵⁴⁾

この屈辱感をカッサンドラは「スカマンンドラスの河畔」に住む古老アンキセスに話した。アンキセスは笑いながら彼女に言う。「ねえ、お嬢さん、とにかく注意なさい。あのエウメロスは、古靴の片方が他方を必要とするようにアキレウスを必要とするのだ。しかしそこには、彼が卑劣きわまる無邪気さであなたに植えつけた原始的トリックが、論理的誤りが潜んでいるのさ。それはあなたが彼の弱点に気づかないでいる限り機能するのさ。つまり、エウメロスは、彼がこれから作らなきゃならないことなのにそれを前提にするのさ。つまり、戦争さ。そこまで来ると彼は戦争を常態と考え、そこからは勝利への道が通じていると仮定するのさ。そうなるとう論敵があなたにまだできることを押しつけてくるのさ」⁵⁵⁾

カッサンドラはエウメロスだけは苦手である。彼は下級官僚からのほりつめてきた男である。「時の人」である。エウメロスにおいては、もはや、啓蒙と自然なるものの具体的葛藤の跡は微塵も見えない。そもそも「ひと」としてのエウメロスが見えてこない。国家の一機能に徹している。血も肉もなくした父権制の完成者エウメロスの「ひと」に語りかけるカッサンドラは、「この男は手に負えない」とあきらめざるをえない。

このエウメロスは、カッサンドラの妹ポリュクセネを使ってアキレウスをおびき出しカッサンドラの兄パリスにアキレウスを殺させようと計画する。ポリュクセネは、時代の男たちに引っ張り回され、挙げ句の果てはアキレウスのおとりにされる。パリスはヘレネーの件で失意のどん底である。今回の策略に手を貸せばこの二人がどうなるかはカッサンドラには見えている。アキレウスは死ぬ。それはカッサンドラにはわかっている。しかし彼女の兄、妹のことを考えるとこの計画に賛同できなかった。

54) s. o. S. 138

55) s. o. S. 141～142

「さて、カッサンドラ。そなたには分別がある。そうだろう。わたしは言った。いいえ。そなたは賛成しないのか。はい、しません。だが、そなたは口をつぐむだろう。いいえ、とわたしは言った。不安げに母のヘカベーはわたしの腕をつかんだ。今、どんなことになるのか、母にはわかっていて。わたしにも。王が言った。これを逮捕しろ」⁵⁶⁾

この後の話はギリシャ神話で起こったとおりである。ラオコーンの予言も聞き入れられず、いわゆる「トロイアの木馬」の作戦でギリシャ軍がトロイアの不滅の門を易々開け、トロイアはギリシャ軍に滅ぼされた。

カッサンドラの最愛の人アイネイアスのみがイデ山の山中に逃げのびる。カッサンドラは行動を共にしない。

アガ멤ノンの捕囚の身となってミケーネに連れてこられたカッサンドラの「語り」はここで終わる。

ヴォルフにとって『カッサンドラ』は単なる神話ではない。あるいは、神話の脱神話化などでもない。神話は歴史そのものである。現代に続く歴史の一齣である。3000年の歴史で、一体何がどう変わったのか。啓蒙の申し子である父権制そのものは、頑強に現代も維持されている。メネラオスは現代にも生き続けている。アキレウスもいる。プリアモスもアガ멤ノンもいる。もちろんカッサンドラも。

(この論文は、1997年9月から1998年8月までのドイツのハノーバーへの在外研究の成果発表の一部である)

参 考 文 献

- クリスタ・ヴォルフ『カッサンドラ』中込啓子訳、恒文社、1997年
クリスタ・ヴォルフ『ギリシャへの旅』中込啓子訳、恒文社、1998年
クリスタ・ヴォルフ『残るものは何か』保坂一夫訳、恒文社、1997年

56) s. o. S. 170

Summary

Auf dem Weg nach Tabou, “Kassandra”

Yoshimi Morishima

Hier wird untersucht, was Christa Wolf in ihrem Roman “Kassandra” zu sagen versuchte.

1993 schrieb Wolf an Günter Grass, “die Zensur stocherte in den <Vorlesungen> (Voraussetzungen einer Erzählung: Kassandra) herum; ich wartete gespannt, ob sie wagen würden, die Botschaft der Erzählung zu verstehen, nämlich, dass Troja untergehen muss”.

Wolf meint damit den Untergang von DDR. Nicht nur den Untergang von einem Staat, sondern auch den Untergang von der europäischen Kultur, nämlich den Untergang von der patriarchalischen Kultur.

Die Figur “Kassandra” nahm sie von der <Orestie> des Aischylos.

Adorno und Horkheimer sagt in der “Dialektik der Aufklärung”, dass selbst in der Mythologie die Aufklärung beherrschend sei. Adorno und Horkheimer sagen damit, dass schon in der Mythologie die Natur als solche nicht mehr dasei. Die Natur verschwindet. Die Menschen beherrschen durch die Aufklärung die Natur. Von diesem Blickpunkt aus ist die Entwicklung der Geschichte von Europa betrachtet.

In der Mythologie versucht Wolf was Natürliches zu finden, was die Männer unter ihre Beherrschung setzten, nämlich die “Mutternatur”.

Sie betrachtet deshalb die Entwicklung der Europageschichte die Entwicklung der patriarchalischen Macht.

“Dass Frauen zu der Kultur, in der wir leben, über die Jahrtausende hin offiziell und direkt so gut wie nichts beitragen durften, ist nicht nur eine

entsetzliche, beschämende und skandalöse Tatsache für Frauen- es ist, genaugenommen, diejenige Schwachstelle der Kultur, aus der heraus sie selbstzerstörerisch wird, nämlich ihre Unfähigkeit zur Reife”.

Als Wolf 1990 “Was bleibt” veröffentlichte, trieben die westdeutschen Feuilletons heftige Kritik gegen sie.

Es geht um die Frage, “ob die führenden Schriftsteller der DDR eine autoritätsgläubige <Stillhalteliteratur> geschrieben haben, die, trotz geringer Kritik im Detail, das System, den Staat und die undemokratische Gesellschaftsordnung stabilisierte.

Für Wolf scheinen sowohl die westliche Kritik als auch die östliche Kritik gleich unbedeutend. Gleich ist das System vom Patriarchat.

Die typischen Beispiele vom Patriarchat sind die Kernwaffen, die alle Menschen vernichten können.

Wolf versucht, im Matriarchat den Lösungsweg für die Zukunft der Menschen (Auf dem Weg nach Tabou) zu finden.